

経負坂古墳群

(KEOIZAKA KOFUNGUN)

一般県道草野・横田線(東比田工区)特別県単事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年3月

広瀬町教育委員会

経負坂古墳群

(KEOIZAKA KOFUNGUN)

一般県道草野・横田線(東比田工区)特別県単事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年3月

広瀬町教育委員会



経負坂古墳群全景

序

広瀬町内には戦国時代の名族、尼子氏の居城であった月山富田城跡や、その城下町の跡である富田川河床遺跡を始め多くの史跡が存在しております、また、江戸時代には松江藩の分藩として広瀬藩が創設されたため、現在に至っても城下町としてその風情をよくとどめております。

しかし古代の遺跡は広瀬町内ではあまり多くは知られておらず、この遺跡の所在する比田地域でも平成9年度に発掘調査された足子谷横穴墓の他はあまり知られておりません。

この度発掘調査致しました経負坂古墳群では縄文時代の落とし穴、古墳時代の横穴墓、室町時代の墓地が見つかり、土器や石器など当時の生活・文化を知る上で貴重な資料も出土しました。これら先人が遺した足跡を末永く後世に伝えることにより、歴史豊かな町である広瀬となりうると考えます。

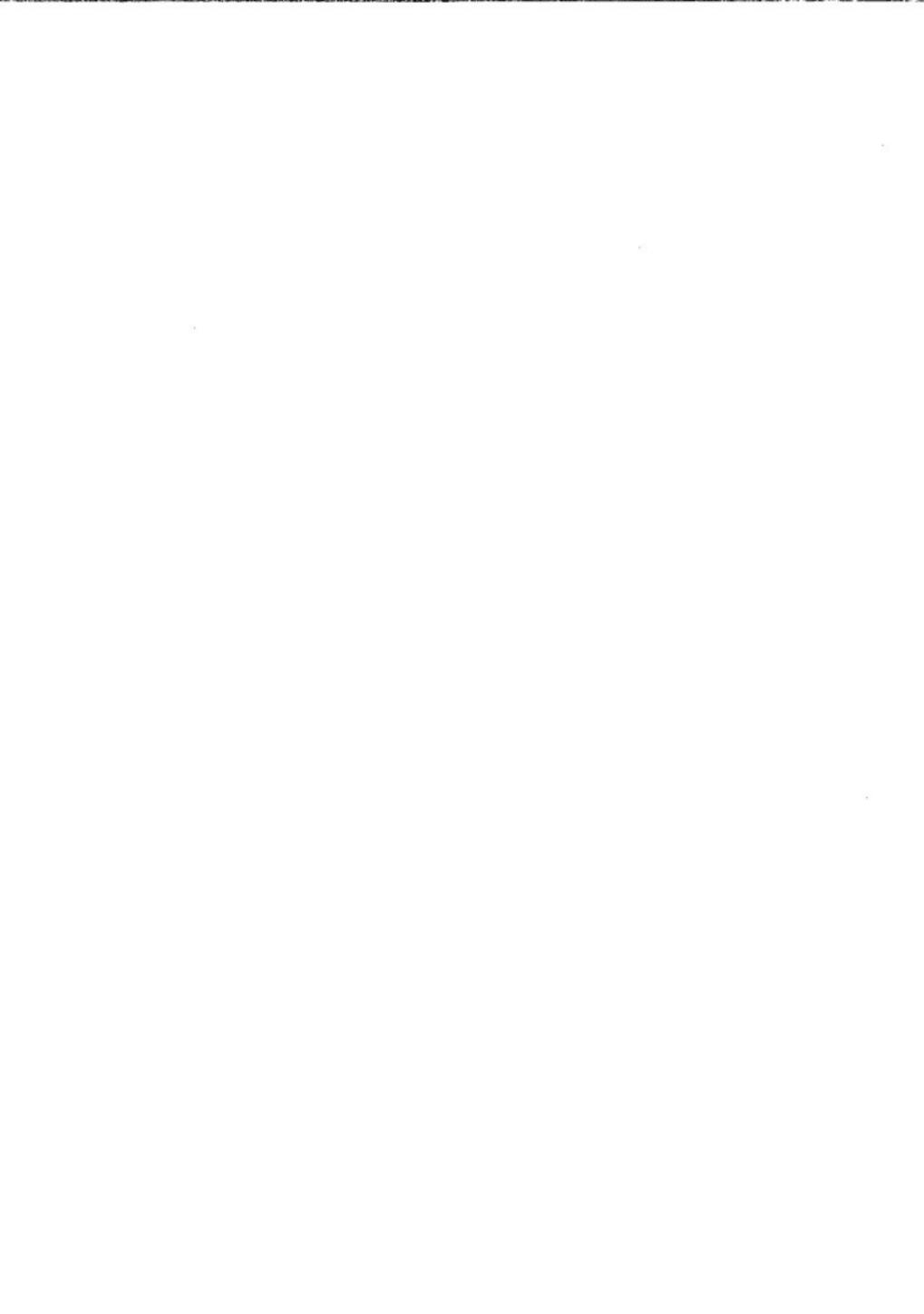
今回、この遺跡の調査成果報告を刊行する運びとなりました。本書の資料が広く活用されることにより、文化財保護精神の普及、生涯学習及び歴史研究の一助となれば幸いと考えます。

おわりに、調査を指導していただいた島根県教育委員会及び関係各機関の方々、また、あらゆる面においてご協力下さいました島根県広瀬土木事務所、地元の方々に対し、深く感謝申し上げます。

平成13年3月

広瀬町教育委員会

教育長 村上晴夫



例　　言

1. 本書は島根県広瀬土木事務所の委託を受けて、広瀬町教育委員会が平成11（1999）年度から12（2000）年度にかけて実施した県道草野・横田線建設予定地内埋蔵文化財（経負坂古墳群）発掘調査報告書である。

2. 発掘地の住所は次の通りである。

能義郡広瀬町東比田1340他

3. 調査組織は次の通りである。

[平成11年度] 試掘調査

調査主体 広瀬町教育委員会 教育長 村上晴夫

事務局 桥野光範（広瀬町教育委員会教育次長）

古山亮二（　　タ　　文化係長）

内田雅巳（　　タ　　主任）

石原秀樹（　　タ　　主任主事）

調査担当者 舟木 聰（　　タ　　主事）

作業員 柴田孝二郎、柴田定夫、柴田隆進、柴田吉己、庄司光延、蒲生文江、

田辺久仁子、田辺辰子、藤原千代

[平成12年度] 本 調 査

調査主体 広瀬町教育委員会 教育長 村上晴夫

事務局 加納 弘（広瀬町教育委員会教育次長）

古山亮二（　　タ　　文化財係長）

石原秀樹（　　タ　　主任主事）

調査担当者 舟木 聰（　　タ　　主事）

調査補助員 清水初美（臨時職員）、金子義明（広瀬町立歴史民俗資料館嘱託職員）

作業員 家島瑞子、蒲生 盛、蒲生富子、蒲生文江、蒲生礼子、熊谷ハナ、柴田綾子、

柴田孝二郎、柴田定夫、柴田澄子、柴田文枝、柴田吉己、祖田健一郎、

田辺久仁子、田辺辰子、野尻幸代、藤原千代、吉田 博

遺物整理 石原八代枝、西村千枝子、稻田安恵

4. 発掘調査及び報告書の作成にあたって以下の方々からご助言を頂いた。記して感謝の意を表す
る。（敬称略、順不同）

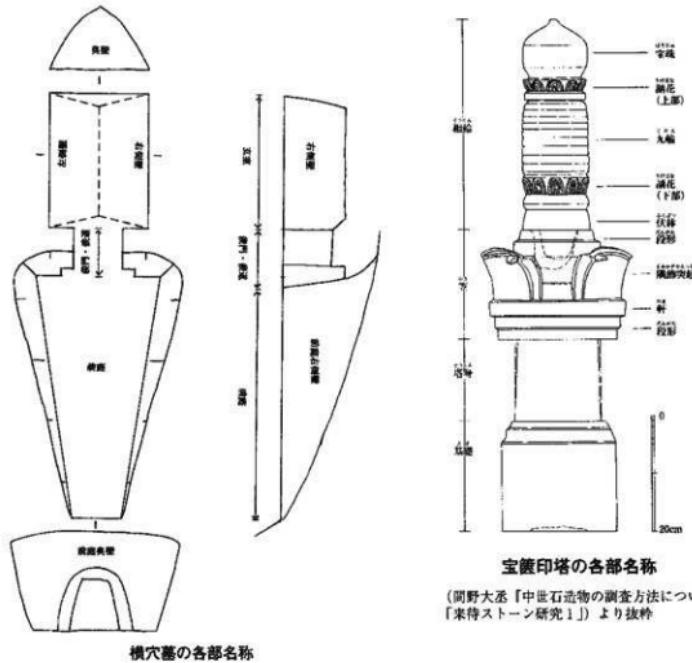
足立克己（島根県教育府文化財課埋蔵文化財係長）、池淵俊一（同主事）、丹羽野裕、柳浦俊一、

間野大丞、中川 寧、目次謙一、東森 晋、今岡利江（以上、島根県埋蔵文化財調査センター）、

梅木茂雄（江津市教育委員会）、木場幸広（高取町教育委員会）

5. 本書で使用した造構の略号は次の通りである。
- S K - 土坑、S D - 溝状造構
6. 本書で使用した方位は磁北を示す。
7. 造構の図面作成は舟木、清水、石原秀樹、金子が行った。
8. 遺物の実測は舟木、清水、石原秀樹、金子が行い、浄書は清水、西村が行った。また遺物写真は金子が撮影した。
9. 本書の編集・執筆は舟木が担当した。また第IV章の1号墳出土宝篋印塔については間野大丞氏執筆の原稿に舟木が加筆した。
10. 本遺跡出土資料及び実測図、写真等の記録資料は、広瀬町教育委員会で保管している。

(凡例)



(間野大丞『中世石造物の調査方法について』
「米待ストーン研究1」) より抜粋

目 次

序 文	(SK 01)	14	
例 言	(SK 03)	14	
目 次	(SK 04)	14	
I 位置と環境	(SK 05)	14	
II 調査に至る経緯	(SK 06)	14	
III 調査の経過	(SK 07・08)	14	
IV 遺跡の概要	(SK 09)	14	
1. I 区の調査		(出土遺物)	18
(1号墳)	6	2. II 区の調査	
(2号墳)	11	(1号横穴墓)	20
(SD 01)	11	(2号横穴墓)	25
(SD 02)	12	(SK 02)	28
(3号墳)	12	V 小 結	29

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡分布図	3	第13図 SK 05 実測図	16
第2図 遺跡全体図	5	第14図 SK 06 実測図	17
第3図 1号墳平面図	6	第15図 SK 07・08 実測図	17
第4図 1号墳土層図	7	第16図 SK 09 実測図	17
第5図 宝鏡印塔実測図	9	第17図 SK 01・04 出土遺物	19
第6図 1号墳出土遺物	10	第18図 その他の遺物	19
第7図 SD 01 実測図	11	第19図 1号横穴墓実測図	21
第8図 SD 02 実測図	12	第20図 1号横穴墓前庭遺物出土状況	23
第9図 3号墳実測図	13	第21図 1号横穴墓出土遺物	24
第10図 SK 01 実測図	15	第22図 2号横穴墓実測図	26
第11図 SK 03 実測図	15	第23図 2号横穴墓出土遺物	27
第12図 SK 04 実測図	16	第24図 SK 02 実測図	28

I 位 置 と 環 境

軽負坂古墳群は能義郡広瀬町東比田1340他に所在し、直下に飯梨川の支流である福留川が流れる丘陵上に位置する。北麓には湯田温泉があり、休日ともなると多くの湯治客で賑わっている。遺跡の所在する比田地域は良質の砂鉄を産出することから古来より製鉄の盛んに行われた所であり、そのため各所で砂鉄採取のため山を削る「鉄穴流し」と呼ばれる作業の痕跡が見受けられる。

周辺では周知の遺跡は極めて少なく、古代の遺跡としては東比田では昭和6年県道母里・横田線建設の際発見され、横穴墓2基からなり、人骨3体と共に須恵器が出土した松本横穴墓群⁽¹⁾、西比田では平成8年、送電線鉄塔工事の際発見され、人骨8体と共に須恵器、耳環、鉄器類などが出土した足子谷横穴墓⁽²⁾、伊邪那美尊陵墓と伝わる御墓山古墳⁽³⁾がある。また、宇殿之奥から庵ノ上にかけての耕作地では近年、岡場整備中に縄文～中世にかけての土器片が出土している。

中世にはこの付近も尼子、毛利の合戦の舞台となり、西北比田では吉川元春が陣を敷いたと伝わる諫訪山城跡⁽⁴⁾の他、細田城跡⁽⁵⁾、梶福留古城山城跡⁽⁶⁾、夏見山城跡⁽⁷⁾があり、東比田では虫木に所在する茂那木城跡（虫木城跡）⁽⁸⁾と道城に所在する道分城跡⁽⁹⁾、雲ヶ城跡⁽¹⁰⁾が知られている。近世以降のものとしては製鉄遺跡で東比田にある夫婦松成鉛跡⁽¹¹⁾、大呂谷鉛跡⁽¹²⁾、西北比田にある市原鉛⁽¹³⁾、芝原鉛⁽¹⁴⁾がある。

II 調 査 に 至 る 経 緯

平成8年、遺跡の所在する丘陵が県道草野・横田線の拡幅工事のルート予定地になり、当時広瀬町立比田中学校教頭であった石井悠氏が現地を踏査したところ、尾根筋に古墳の可能性がある地形の高まりを3箇所確認した。またその内一基の上には中世のものとみられる宝塚印塔の残欠が祀つてあり、中世墓の存在も予想された。

広瀬町教育委員会では、比田地区では数少ない古墳であり、また地域の歴史を解明する上で貴重な遺跡であるため、鳥根県広瀬土木事務所と本遺跡の取り扱いについて協議した。しかし諸般の事情によりルート変更は難しいという結論に達したため、平成11年度末に広瀬町教育委員会が主体となり試掘調査を行い、その成果を踏まえた上で平成12年度に記録保存のための発掘調査を実施することになった。

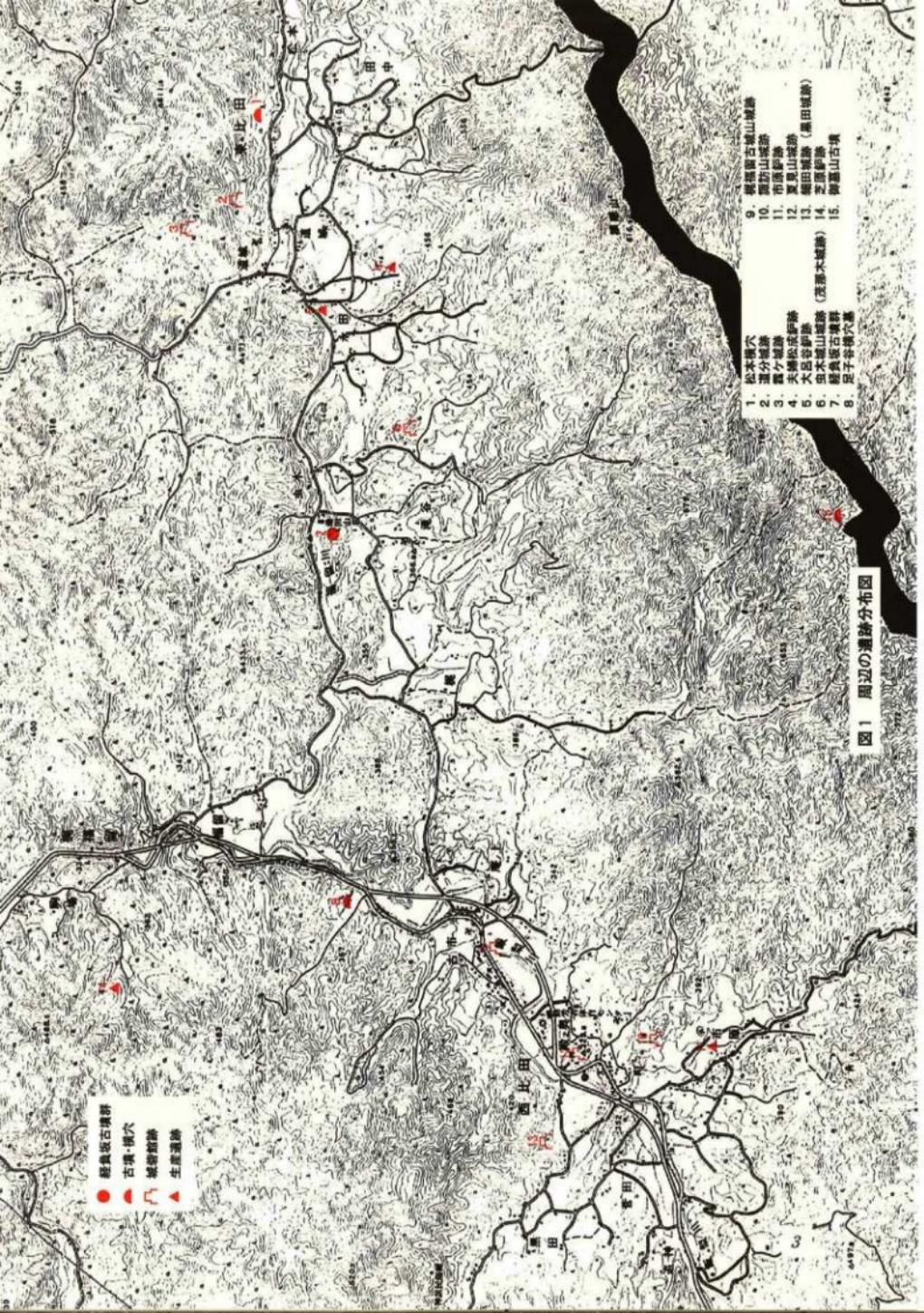


図1 周辺の遺跡分布図

III 調査の経過

先に述べた尾根筋にある3箇所の地形の高まり以外に、丘陵西側斜面はすり鉢状の緩斜面であることから、集落跡などの遺構が存在する可能性も考えられた。そこで平成12年3月1日より3月31日まで丘陵斜面を中心にトレンチによる試掘調査を行い、遺構の有無について確認した。

その結果、西側斜面では表土直下のクロボク層の中から縄文時代晚期後葉の突帯文土器深鉢片や石鏃・スクレイパーなどの石器を出土する地点があり、また、クロボク層下地山面である真砂土層には土壙と思われるプランの一部を検出した。

東側斜面は西側斜面に比べ全体的に勾配がきついため、遺構の存在する可能性は低いとみられたが、比較的傾斜の緩い地点に設定したトレンチで不自然な地山の落ち込みを確認し、少し掘りすぐめたところ、明らかに他から運んできたと考えられる石材数点とともに須恵器壺片と鉄鏃が出土したため、横穴墓の墓道部であることを確認した。

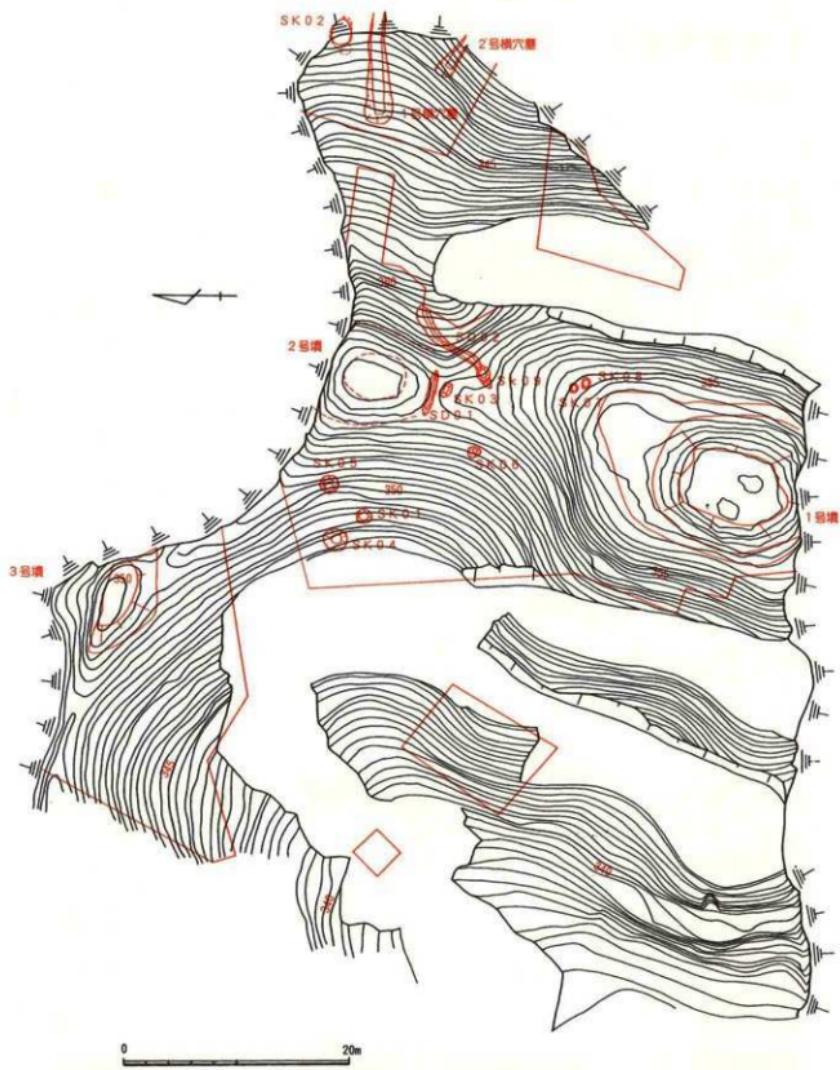
さらに調査地内に繁茂している樹木の伐採作業用の通路を確保するため、西側斜面の一部を重機が掘削した際には須恵器の長頸壺が3個体出土している。

のことにより、当初は丘陵尾根筋のみ調査する予定だったが、丘陵斜面部にも遺構が存在する事を確認したため、それを踏まえて調査区を設定した。

現地調査は平成12年5月8日に開始し、同年12月29日に終了した。



経負坂古墳群調査前遠景



第2図 遺跡全体図

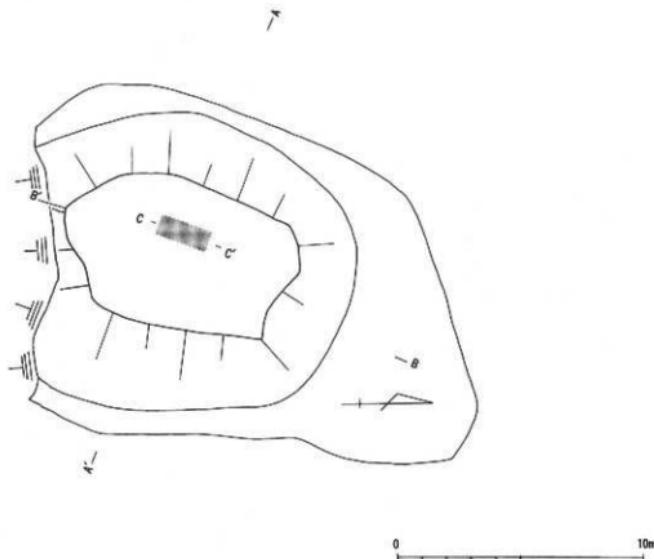
IV 遺 跡 の 概 要

1. I 区の調査

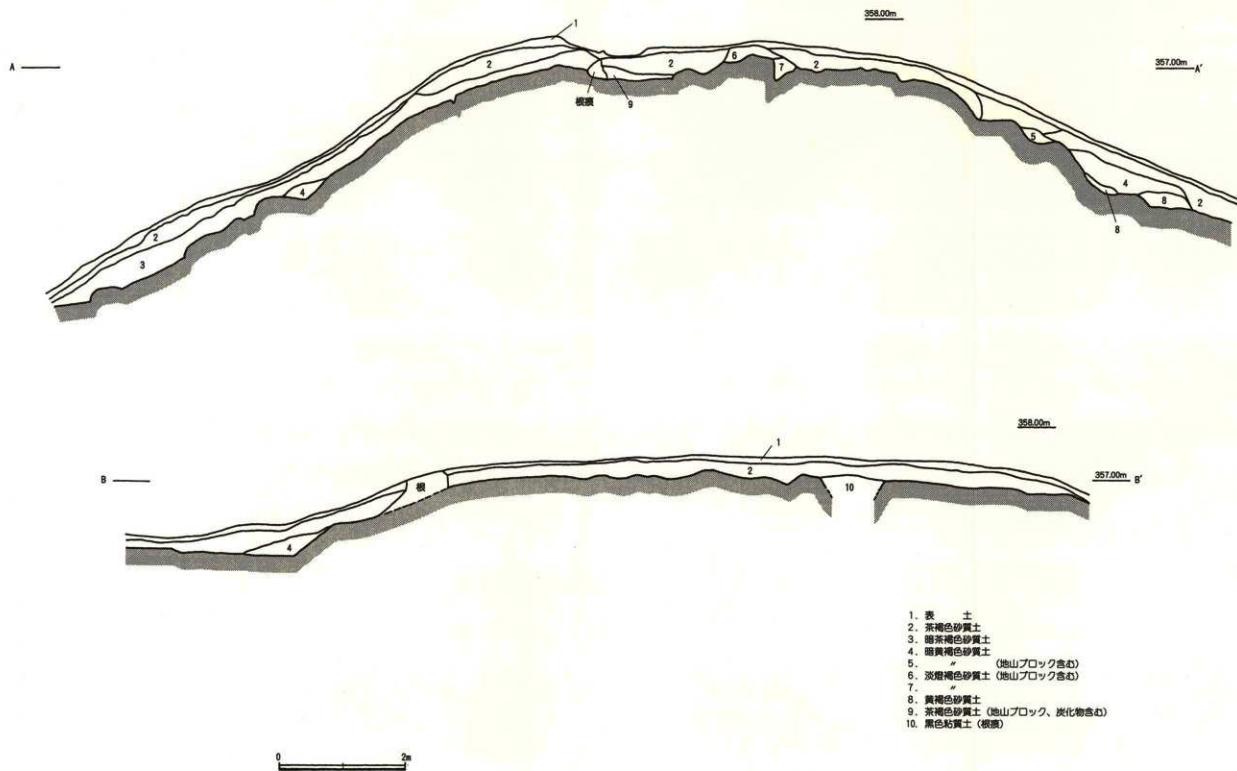
(1号墳)

本遺跡中最高所に位置し、周辺の集落を一望できる。頂部には地元において古来より「経塚」「けいざかの五輪さん」と呼ばれ、信仰されてきた宝篋印塔一基がある。当初は一辺13m程度の方墳と推定し、墳丘中央に十字ベルトを設定して調査を進めたところ、南端は後世の土砂採取により削平を受けているが、墳丘は長辺約14m、短辺約12.5mの楕円形を呈するもので、周開を削り出すことによって北側に南北約6.6m、東西約11mの舌状の平坦面を造り、墳丘の東西も幅約1m程度削ることで墳裾としていることがわかった。墳丘上には表土下に茶褐色砂質土と暗茶褐色砂質土の堆積が見られ、その下は地山である黄褐色砂質土及び粘土層となる。石塔直下には暗黄褐色砂質土と炭化物を含む層が見られ、何らかの人為的な掘削が行われたように見受けられた。墳丘中央部から南部にかけての表土中から宝篋印塔笠部の破片と備前系陶器壺の底部破片が出土したため、後世の攪乱を受けているものと考えられる。

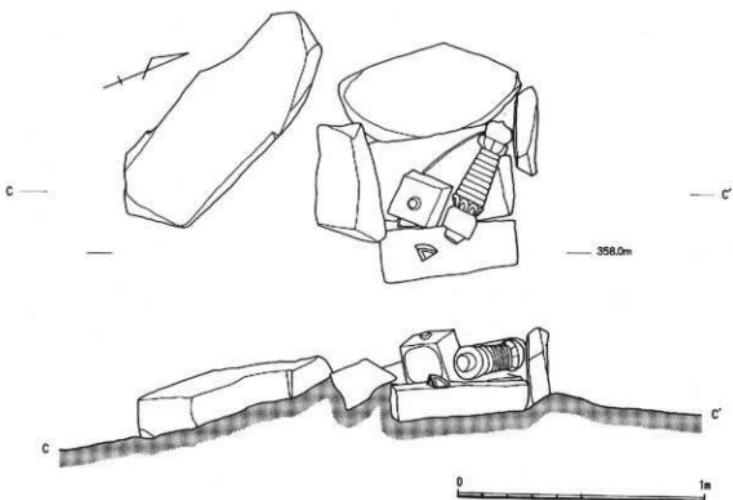
堆積土及び地山面共に主体部と思われるものは検出されず、古墳時代の遺物も皆無であったため、古墳ではなく宝篋印塔を主体とする中世墓であるとの結論に達した。



第3図 1号墳平面図



第4図 1号墳土層図



第5図 宝篋印塔実測図

(出土遺物)

宝篋印塔（1～3）は墳丘中央西側にあったもので、相輪部1点、笠部1点、塔身部1点である。相輪部と塔身部は完全な形で残っているが、笠部は隅飾突起の一隅のみである。

相輪部はほぞを含めた全長は56.4cmである。宝珠は高さ8.7cm、径11.8cm。九輪は幅7mm、深さ3mm前後の溝で区画する。宝珠下の請花は稜をもつ単弁を八葉、九輪下の請花は覆輪付き複弁を八葉めぐらしている。笠部に差し込むためのほぞは基部で直径9cm、長さは5.3cmでしっかりとしている。

笠部は四隅の隅飾突起のうち一隅の先端のみ残る。側面は輪郭を巻く。二弧式輪郭付きではないかと考えられる。

塔身部は一辺18.6cmの立方体である。上下面には基部径6.6cm、高さ1.8cmのほぞが作りだされている。四面には月輪に梵字が薬研彫りで陰刻してある。

この宝篋印塔はその特徴からみて15世紀前半頃のものであると考えられる。¹⁰⁾

陶器片（4）は表土中から宝篋印塔の破片と共に出土した。備前系陶器壺の底部と考えられるものである。全形は不明であるが、底部径12.8cmを測る。器表面はやや青みがかっており、内外面ともナデによる調整を施しているが、底部付近の側面はヘラケズリを施している。時期は不明であるが、宝篋印塔の藏骨器であった可能性がある。

錢貨（5）は墳丘上ほぼ中央付近の表土中から出土している。銅銭6枚、鉄銭5枚で、腐食がひどく、文字がかろうじて判読できるものは3枚で、いずれも寛永通宝（新寛永）である。

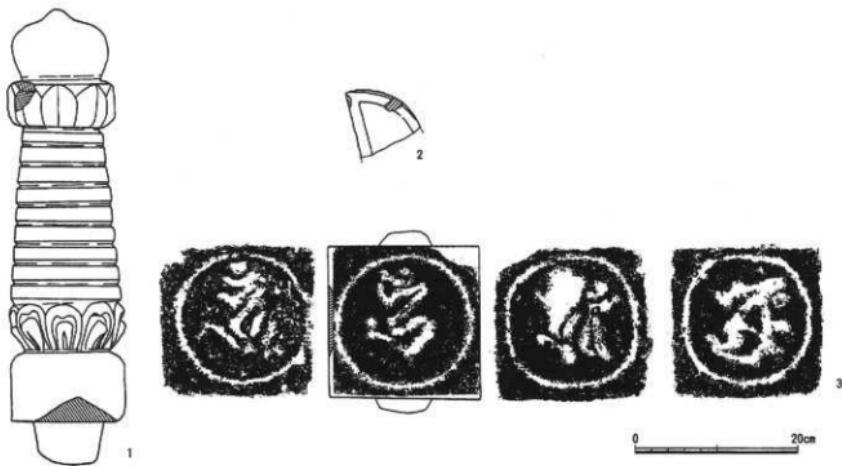


図6 1号墳出土遺物（錢貨は1/1）

(2号墳)

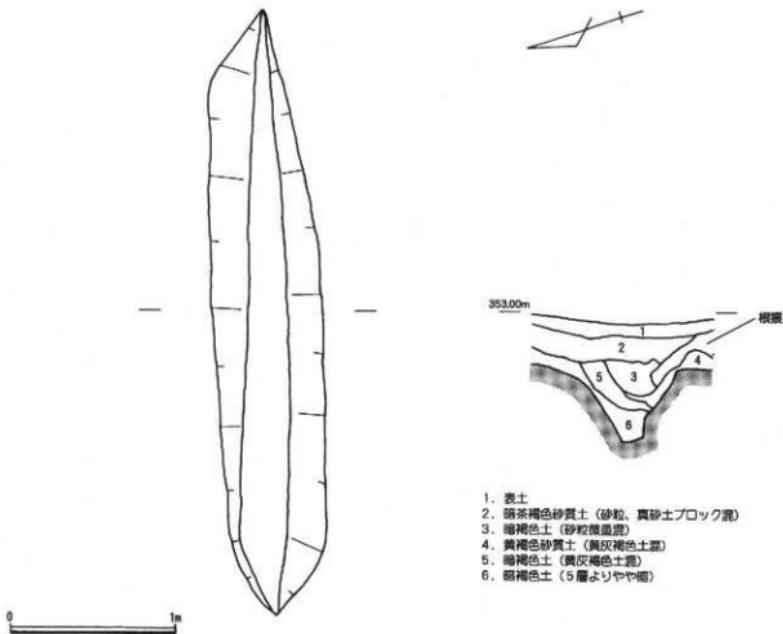
1号墳の北側に位置する。北側は後世の鉄穴流しにより削平を受けている。当初は一辺約10m前後の方墳と考え調査を進めたところ、南裾部に溝状遺構（SD01）を検出したが、表土の下は黄褐色砂質層が堆積しているのみで、盛土らしきものは見受けられず、主体部も確認されなかった。また、出土遺物も皆無だったので、本遺構は古墳ではなく自然地形による高まりであると判断するに至った。

(SD01)

2号墳南端で検出した溝状の遺構である。

調査前から尾根筋を東西に切断するように地形の落ち込みが顕著であったので、当初は2号墳の周溝と考えて調査を進めた。その結果長さ約4.2m、最大幅約70cm、深さ約50cmを測るほぼ直線的な溝状遺構であることを確認した。

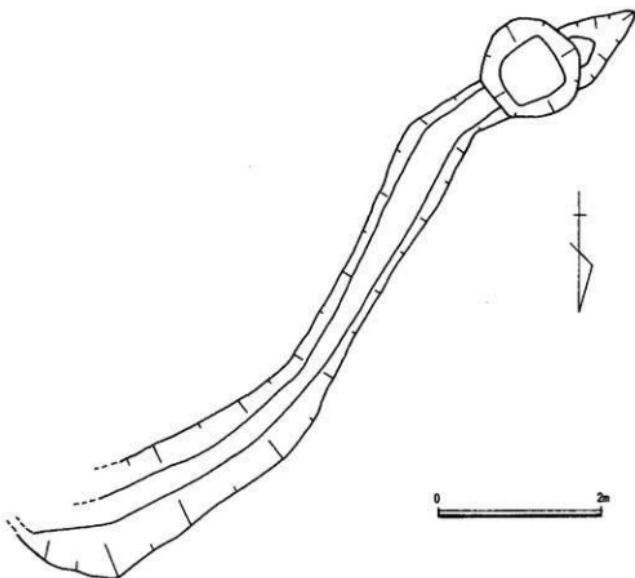
しかし、古墳の周溝としては貧弱で、出土遺物も皆無であることから、その性格を特定するに至らなかった。



第7図 SD01実測図

(SD 02)

2号墳南側の尾根頂部から2号墳の東側斜面にかけて検出した溝状遺構である。蛇行しながら下っていき、調査区外へと続いている。検出部分の長さは10m、幅は80cmで、内部は暗褐色土が堆積していた。遺構底部には大部分に鉄分の付着が認められ、水の流れた形跡があった。遺物は皆無であるため遺構の時期、性格については不明であるが、山道の跡とも考えられる。

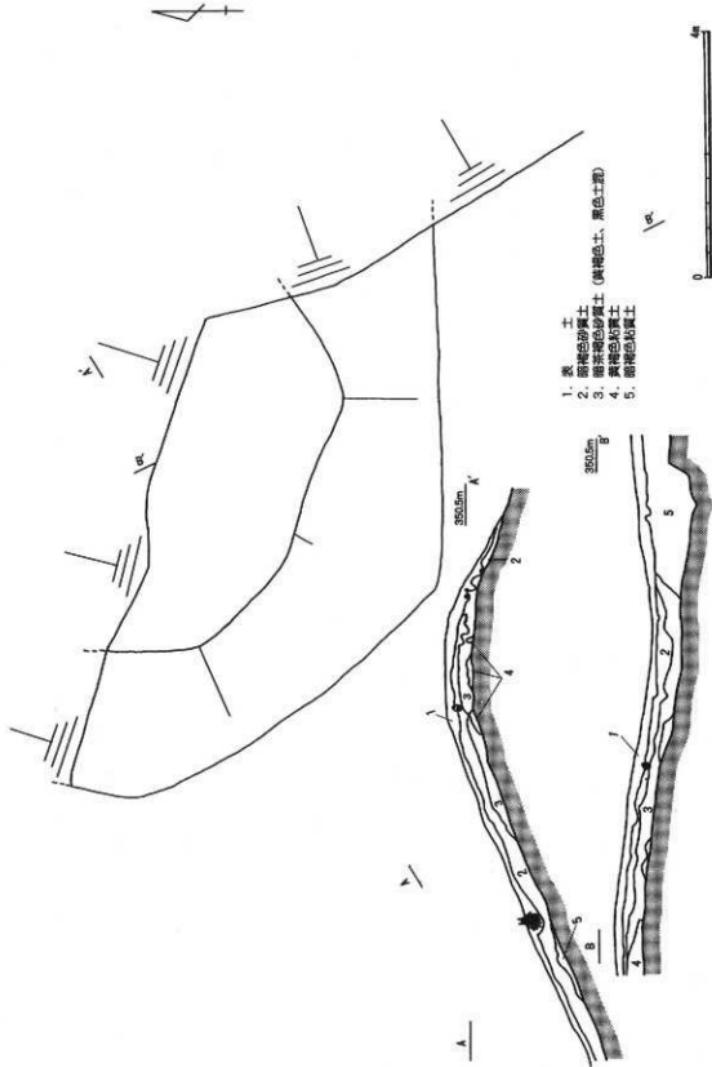


第8図 SD 02 実測図

(3号墳)

本遺跡中最北端に位置する。東側は鉄穴流しによって大きく削られている。

調査の結果、表土下は若干の暗褐色土と地山である真砂土の風化層が堆積しているのみで、南側裾部には幅約1.5mの周溝とも考えられる溝を検出したが、主体部、遺物共に検出されなかつたため、古墳と断定するには至らなかった。



第9図 3号墳実測図

(SK 01)

上部径約1.4m、底部径約90cm、深さ約1.4mを測る円形の土壙である。内部には暗褐色土と地山崩落層である真砂土が堆積しており、第3層の暗褐色土中から縄文時代後期の土器片が11点出土しており、遺構の時期は概ねこの時期のものと思われる。

遺構の性格は不明である。

(SK 03)

S D 0 1 の南に隣接する楕円形の土壙で、長軸約1.4m、短軸約1m、深さは約80cmを測る。内部には黄褐色及び黄茶褐色砂質土が堆積している。出土遺物は皆無であったため遺構の具体的な時期、性格については不明であるが、狩猟用の落とし穴と考えられる。

(SK 04)

円形の土壙で上部径約2.1m、底部径約90cm、深さ約2.35mを測る。

第3層の暗褐色土中から縄文土器の細片が1点出土している。遺構の具体的な性格及び時期については不明であるが、その形状などからみて狩猟用の落とし穴であると考えられる。

(SK 05)

上部は円形で、径約1.7m、底部は楕円形を呈し、長径約82cm、短径約63cm、深さ2.16mを測る。東側の壁は上面から約1.6m程の所で穴が狭まっている。

内部には暗褐色粘質土と黄褐色砂質土が交互に堆積しているのみで、出土遺物は皆無であった。遺構の具体的な性格及び時期は不明であるが、形状などからみて落とし穴であると考えられる。

(SK 06)

SK 03 の西側に位置する楕円形プランの土壙で、落とし穴と考えられる。

上部は長軸1.1m、短軸87cm、床面はほぼ円形で径は45cmを測る。

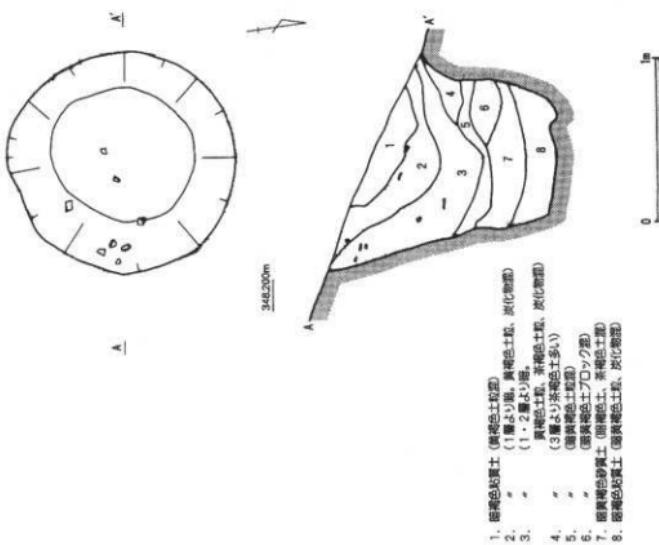
床面は中央に、杭穴とみられる径13cm、深さ24cmの円形のビットがある。遺物は出土しなかった。

(SK 07・SK 08)

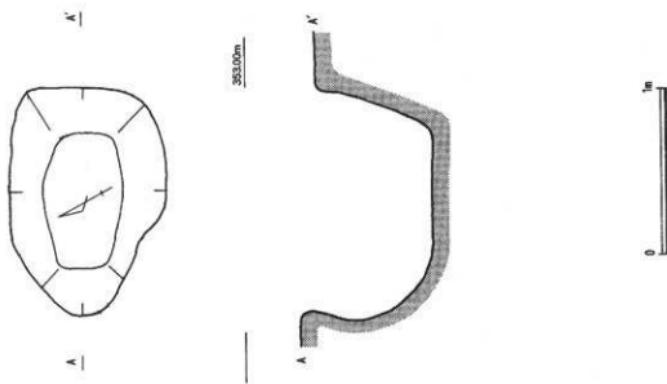
1号墳から2号墳へ至る尾根筋に並んで位置する土壙である。西側の土壙（SK 07）は長軸1m、短軸70cmの楕円形を呈し、深さは10cmである。東側の土壙（SK 08）は長軸90cm、短軸70cmの円形を呈し、深さは10cmである。2つの遺構共極めて浅いもので、内部には炭化物を多量に含む黒色土が堆積していた。遺物が出土しなかったため遺構の時期、性格については不明である。

(SK 09)

S D 0 2 の西端に位置する土壙で上部は S D 0 2 によって若干削られている。直径は1.2mで、底部はやや隅丸方形を呈し、一辺70cmを測る。底部直上には炭化物を非常に多く含んだ土が堆積していたが、壁面及び底部に焼けた痕跡は見られなかった。遺構の時期、性格については不明である。



第10図 SK 01 実測図

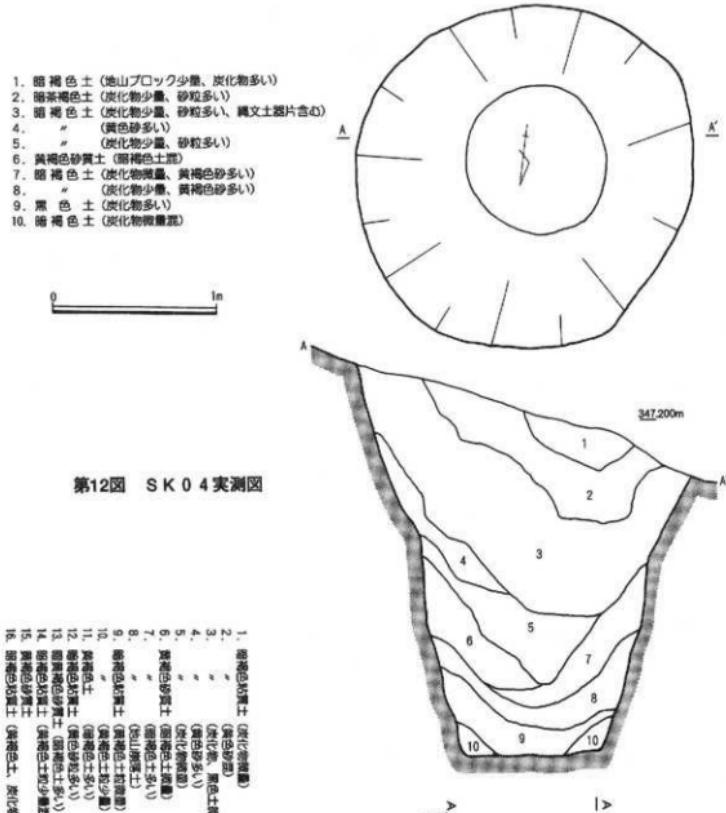


第11図 SK 03 実測図

1. 褐色土 (地山ブロック少量、炭化物多い)
2. 暗茶褐色土 (炭化物少量、砂粒多い)
3. 暗褐色土 (炭化物少量、砂粒多い、鐵文土器片含む)
4. " " (褐色砂多い)
5. " " (炭化物少量、砂粒多い)
6. 黄褐色砂質土 (褐色砂多い)
7. 褐色土 (炭化物微量、黄褐色砂多い)
8. " " (炭化物少、黄褐色砂多い)
9. 黑色土 (炭化物多い)
10. 暗褐色土 (炭化物微量)

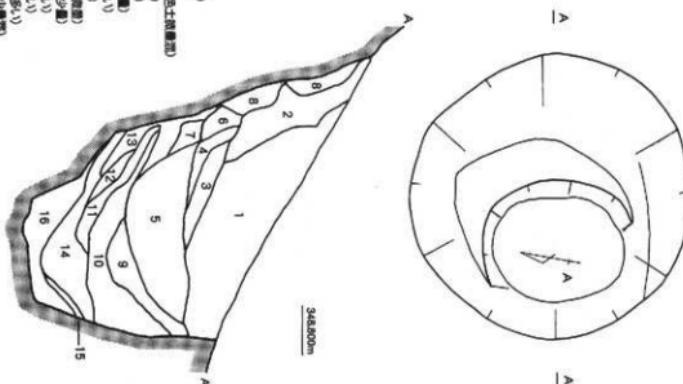
0 1m

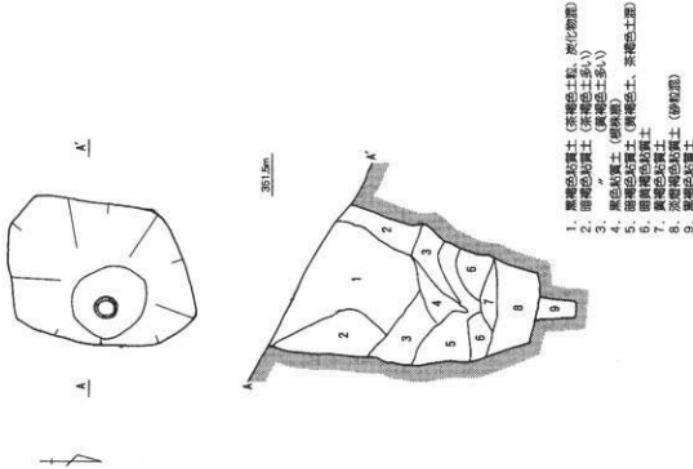
第12図 SK04 実測図



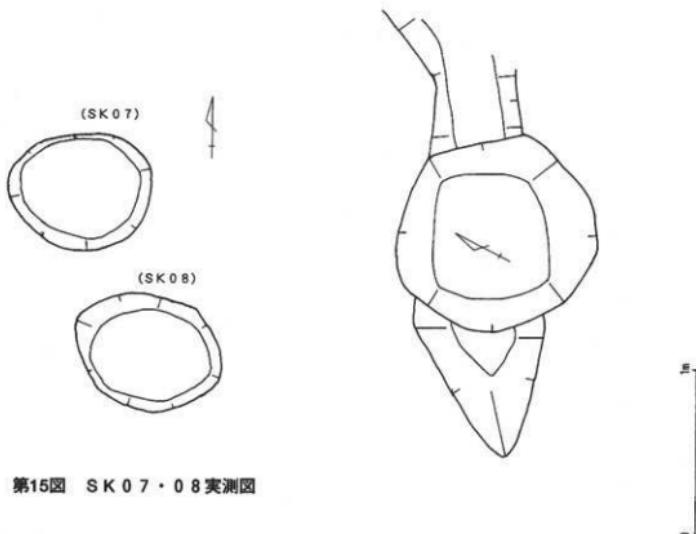
1. 暗褐色砂質土 (褐色砂多い)
2. " " (褐色砂多い)
3. " " (褐色砂多い)
4. " " (褐色砂多い)
5. " " (褐色砂多い)
6. 黄褐色砂質土 (褐色砂多い)
7. " " (褐色砂多い)
8. " " (褐色砂多い)
9. 暗褐色砂質土 (褐色砂多い)
10. " " (褐色砂多い)
11. 黄褐色土 (褐色砂多い)
12. 黄褐色砂質土 (褐色砂多い)
13. 暗褐色砂質土 (褐色砂多い)
14. 黄褐色砂質土 (褐色砂多い)
15. 暗褐色砂質土 (褐色砂多い)

第13図 SK05 実測図





第14図 SK 06 実測図



第15図 SK 07・08 実測図

第16図 SK 09 実測図

(出土遺物)

第17図1～6はSK01出土の縄文土器である。色調は茶褐色で、いずれも縄文時代後期初頭の中津式（福田KII式古段階）とみられる深鉢形土器である。⁽³⁴⁾、同一個体のものと考えられ、頸部及び胴部にかけての破片である。

文様構成はJ字文と胴部に横縄文帯によって繋がれた渦巻文とで構成される磨消縄文を施すもので、一部に赤彩の痕跡をとどめる。本来は器表面全体に赤彩が施されていたものと考えられる。

同じく第17図7はSK04から出土した縄文土器片である。粗製の上器で色調は赤みがかった茶褐色を呈す。細片であるため時期及び器種については不明である。

第18図に掲載した遺物は遺構外の出土遺物である。

1と2は3号墳の調査中に壇裾付近の表土直下の黒色土中から出土したものである。

いずれも縄文時代晩期の突帯土器で、深鉢の口縁部である。1は口唇部に粘土紐を貼り付けることによって強く反らせ、口唇部から2cm下に無文の突帯を施している。

2は口縁部と突帯上にヘラ状工具によるキザミ目を施す。1・2とも色調は黄灰褐色を呈する。

3と4は試掘調査中に丘陵西側斜面の表土下黒色土中から出土した石器である。3は安山岩質の石材で作られたスクレイバーで、長さ8cm、幅4.1cm、厚さは最大で3.5mmを測る。石材の片面を剥離させることにより刃部を形成している。明確な時期は不明であるが、縄文時代のものと思われる。

4は安山岩質の石材で作られた逆V字型の石鏃である。長さ2.4cm、横幅1.4cm、厚さ2mmを測る。

5は試掘調査時に丘陵西側斜面下部に設定したトレーニチから出土した須恵器である。外径は10cm、受部は内傾し、径は8.4cmを測る。一見すると蓋杯片のように見えるが、受部は極端に低く、また口縁部からおよそ2.5cm下からあたかも壺の頸部のように外側に向かってカーブしている。圓化はしなかつたが、これ以外にも須恵器壺の破片が数点伴出していることから、もしかすると壺の一種なのかもしれない。

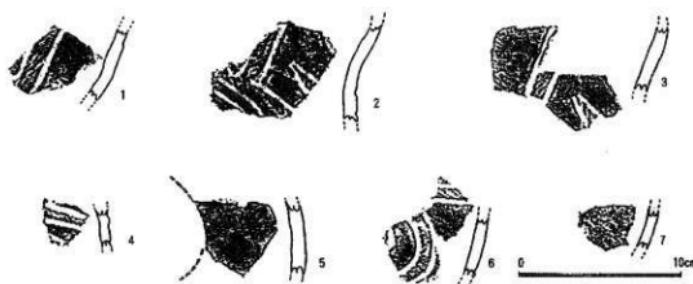
6～8は発掘調査開始前、遺跡内に繁茂している樹木伐採作業のため、重機道を掘削している際に丘陵西側斜面部よりまとまって出土した須恵器である。

6は長頸壺の底部から胴部にかけての破片で、胴部径は14.6cmを測る。胴部は回転ナデ調整を、底部は回転ヘラケズリを施す。

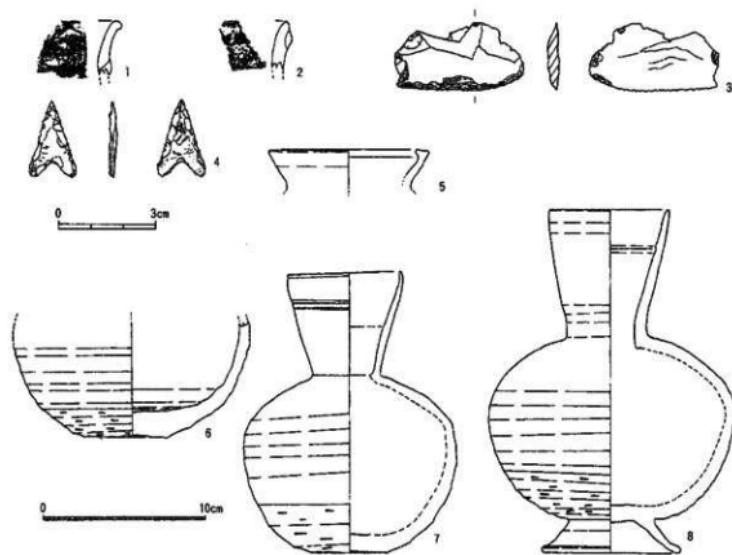
7はほぼ完形の長頸壺で、口縁付近に2条の沈線を施すものである。口径7cm、器高17.3cm、幅13.2cmを測り、口縁部から胴部までは回転ナデにより調整し、底部は丸底で回転ヘラケズリ調整を施す。大谷見二氏の編年⁽³⁵⁾によると出雲6期のものと考えられる。

8は口縁と脚部を一部欠損するが、ほぼ完形の長頸壺である。口径は7.3cm、器高は21.2cm、胴部は最大径15.1cmを測る。底部には径8.3cm、高さ2.1cmの脚がついている、頸部及び胴部上半部は回転ナデにより調整を施し、胴部下半から底部までは回転ヘラケズリ調整を施している。大谷見二氏の編年6期のものとみられる。

6～8の須恵器は竹の棍に抱えられた状態で出土している。ほぼ完形のものを含めて長頸壺のみ3個体分出土していることから、横穴墓の一部が削平された可能性を考え、出土地点を中心に調査区を設定したが、遺構らしいものは検出できなかった。



第17図 SK 01・04 出土遺物



第18図 その他の遺物

2. II 区の調査

(1号横穴墓)

本遺跡の所在する丘陵の東側斜面に位置する。前庭先端部が重機道によって若干削られているが、全長は11.6mを測る。

前庭部は長さ8.2m、幅は先端部で75cm、渓門付近で1mを測る。床面は先端から玄門に向かって緩やかに昇っており、中央には玄室より延びる排水溝がやや蛇行しながら、前庭先端より3.8m付近まで続いている。前庭横断面は逆台形状を呈し、左側壁では最も高いところで床面から1.6mを測る。前庭奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。

前庭上には地山風化土である真砂土を中心とする層が堆積しており、その上には黒色土と暗褐色土を主体とする層が厚く堆積していた。堆積土14層の直上には、動かされた閉塞石とみられる石材4個の他、前庭先端までの広い範囲に大量の須恵器の壺片とともに蓋杯の蓋1点、平瓶1点、鉄錐2点、砥石1点が散乱した状態で出土したことから、二次埋葬時に玄室内から掻き出されたものとみられる。

渓門及び渓道は天井部と側壁奥の一部が崩落しているが、長さ70cm、幅は先端部で30cm、奥部で38cmを測る。

玄室はテント形妻入り形状で、長さ1.75m、幅は前壁で1.3m、奥壁で1.4m、高さ80cmを測り、平面プランは長方形を呈するものである。左右両側壁及び天井部は全体的に崩落がひどく、床面に厚く堆積していた。

床面には奥壁沿いより前庭先端に向かって平面T字型、断面V字もしくは逆台形状を呈する排水溝が延びており、奥壁から先端部までの長さは11.6m、幅は約15cmを測る。前庭先端に近くなるほど徐々に幅広かつ浅くなっていく。

玄室内からは床面及び排水溝内より須恵器の壺片数点が出土した他、床面上北東隅から須恵器の高台付きの杯身一点が、南東隅からは碧玉質の玉髓が一点出土している。何かのまじないであろうか。

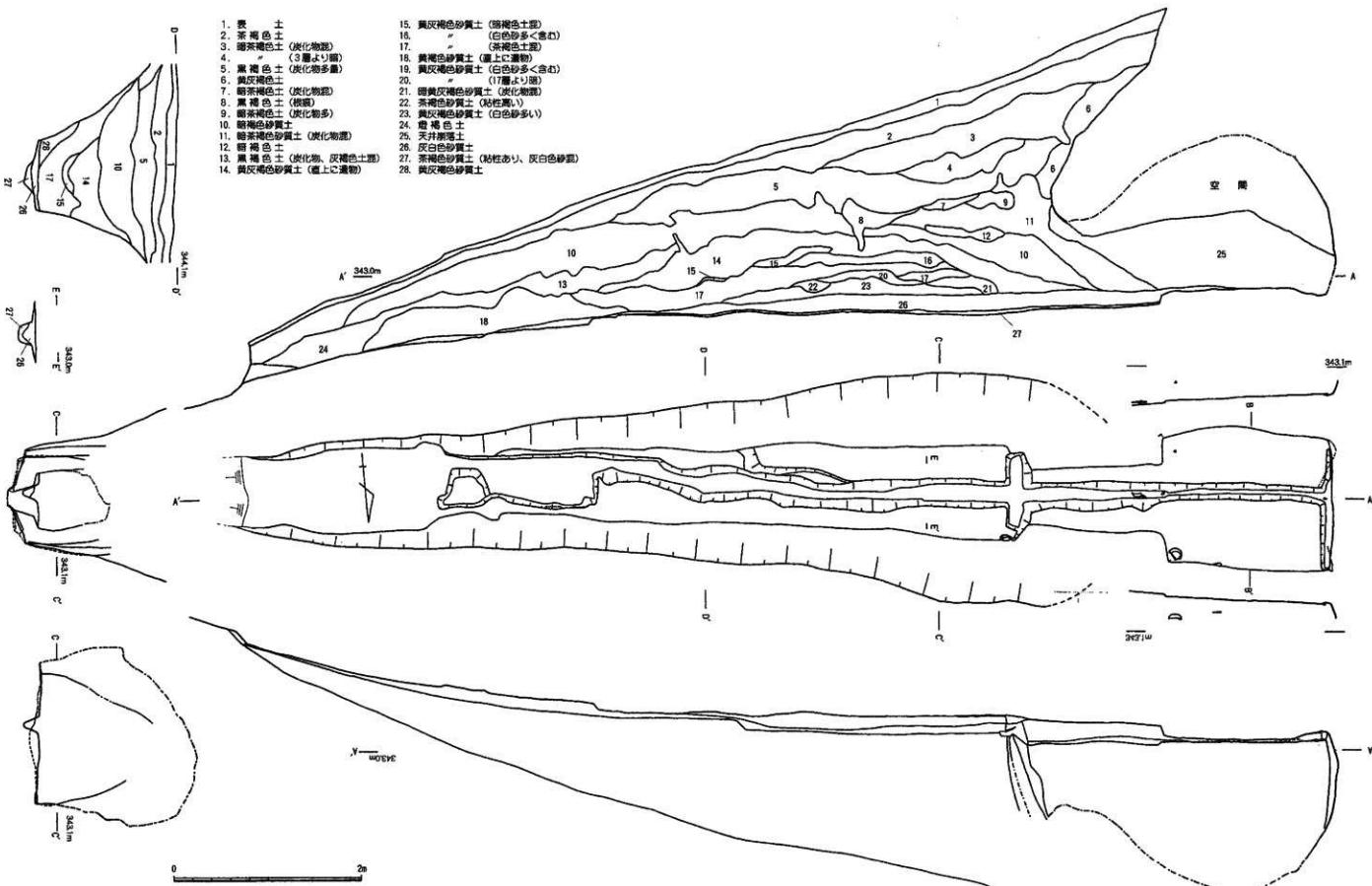
第21図1、3~6は前庭部より出土した遺物である。1は須恵器平瓶で、口径6.3cm、器高15.8cm、頸部長5.2cm、胴部最大径13.4cmを測り、頸部中程に1条の凹線を、肩部にはボタン状の浮文1つが施されている。底部には「×」のヘラ記号もみられる。大谷編年5期以降のものと思われる。

3は蓋で、口径10.3cm、器高3.5cmを測る。6期のものと思われる。

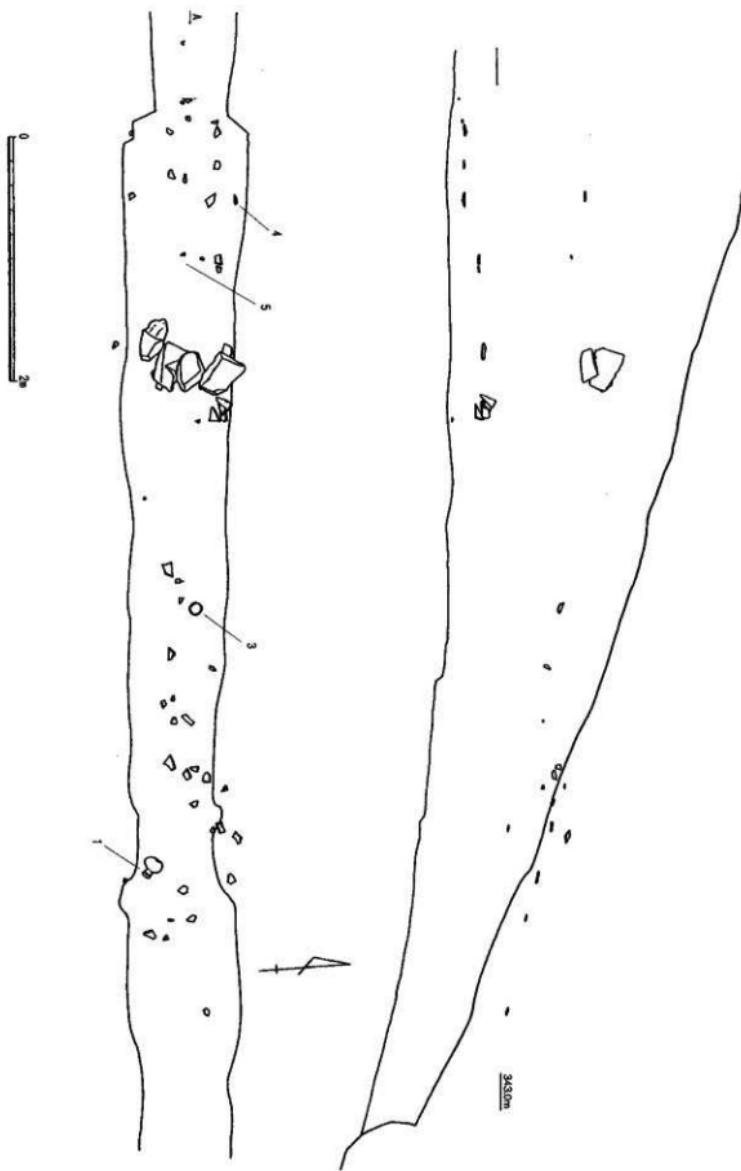
4、5は鉄錐である。4は短茎錐で、錐身長は7.1cmで、幅1.5mmほどの錐身関部を両側に持つ。茎部はくの字に曲がっており、断面形は方形である。5は長茎錐で、錐身長は5.2cmで、幅2mmほどの錐身関部を両側に持つ。茎部長は6.7cmを測り、断面形は方形である。

6は砥石である。材質は黄色みがかった砂岩質のもので、一部に鉄分の付着がみられる。一部欠損しているが、現存長5cm、幅2cmで、断面は長方形を呈する。

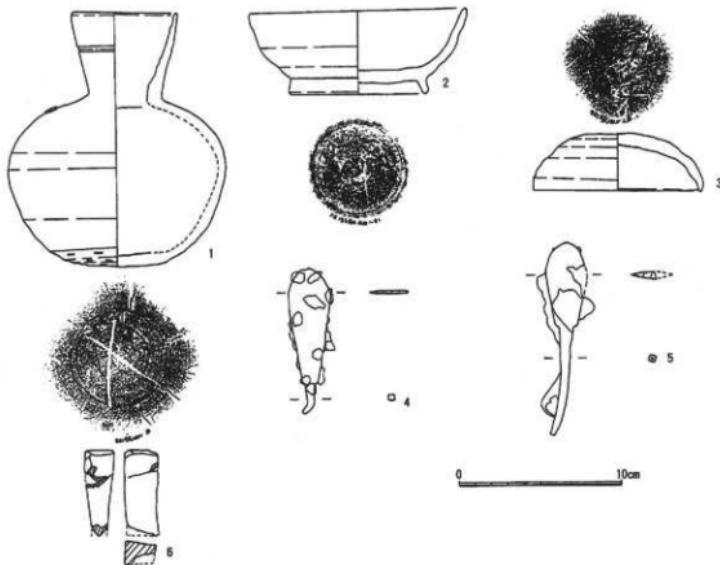
2は玄室内出土の高台付きの杯身である。口径13.3cm、器高5.2cm、底径8.3cmを測る。大谷編年8期のものと思われる。



第19図 1号横穴実測図



第20図 1号横穴墓前部遺物出土状況



第21図 1号横穴墓出土遺物



現地見学会

(2号横穴墓)

丘陵の東側斜面、1号横穴墓の北に位置する。前庭先端部が重機道によって若干削られているが、全長は6.4mを測る。

前庭部は長さ3.2m、幅は先端部で50cm、羨門付近で78cmを測る。床面は先端から羨門に向かって緩やかに昇っており、羨門手前で15cm程度下がっている。前庭横断面は逆台形状を呈し、側壁は約70°と比較的急な角度で掘り込まれている。壁の高さは左側壁で床面から約1.3mを測る。前庭部には暗褐色土と地山風化層を中心とした土が堆積していた。土層観察では二次的埋葬の痕跡は確認できなかった。

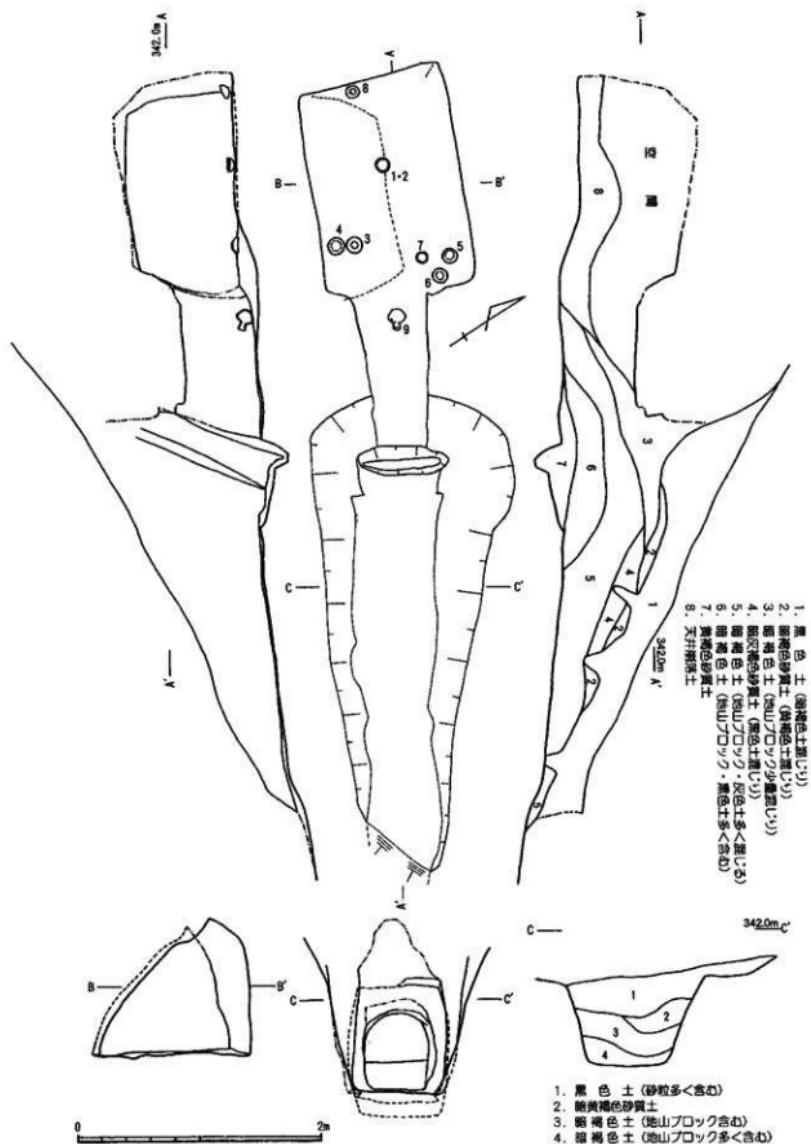
羨門は前庭部より床面で約11cm幅が狭くなっている、前庭部までの長さは約40cmを測る。1号横穴墓で見られたような閉塞石などは存在しなかったが、羨道手前には幅24cm、深さ25cmの溝が掘られていた。溝の断面の傾斜は前庭奥壁の傾斜と一致しているので、閉塞施設を設置するために使用されたと考えられる。羨門の上部は左上がり一部崩落していたが、整った長方形をしている。羨道は長さ1.2m、幅は先端部で42cm、玄室入り口部分で62cm、高さは約60cmを測る。

玄室はテント形妻入り形状である。床面はほぼ平坦だが入り口周辺が15cm程度低くなっている。平面プランは長方形を呈し、規模は長さ1.8m、幅は1.24mを測る。玄室横断面はやや歪な三角形で、天井までの高さは93cmである。天井は右側壁と奥壁が崩落しており、床面には崩落土が18~34cm堆積していた。

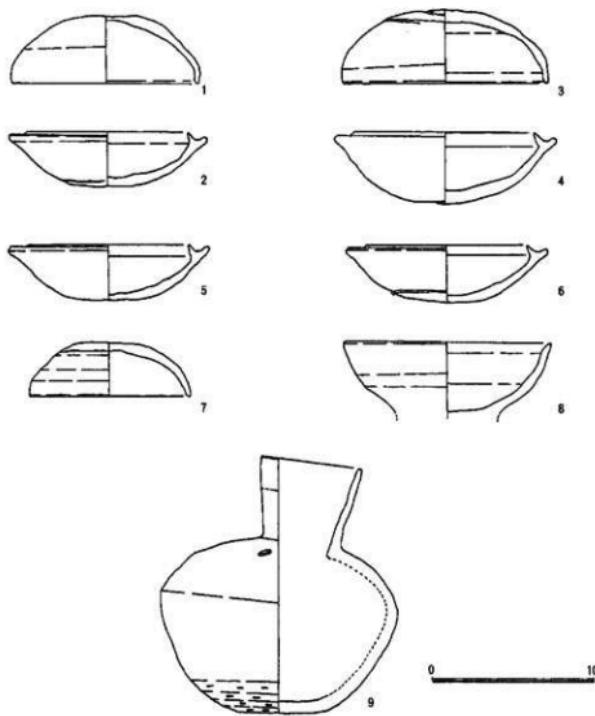
玄室内では須恵器が9点出土した。玄室入り口付近の床面では平瓶(9)が横転した状態で出土した。口径6.1cm、器高15.8cm、胴部最大径14.7cmを測る。底部は回転ヘラケズリ調整を施し、肩部にはボタン状の浮文が2つ施されている。1・2は床面ほぼ中央で、蓋を天地逆にして重ねた状態で出土した。1は口径11.4cm、器高4.2cm、2は口径9.9cm、器高3.4cmを測る。3・4もセットで出土した蓋杯で、4の杯身を伏せた状態で並べてあったので、上器枕として使用した可能性が考えられる。3は口径12.4cm、器高4.6cm、4は口径11cm、器高4.5cmを測る。5~7は玄室右手前にやや間隔をあけ、5・6は伏せた状態で置かれていた。5は蓋杯の杯身で口径9.9cm、器高3.4cm、6も杯身で口径9.9cm、器高3.5cm、7は蓋で口径9.9cm、器高3.3cmを測る。8は奥壁の中軸に近い位置に口縁部を玄門側へ向けてやや立てかけるように置かれていた。形状から高杯と思われるが脚部を欠損しており、見込部分に穴があいている。玄室内で脚部の破片が出土しなかったので、脚部を欠損した状態で玄室内に持ち込まれたとも考えられる。口径は12.7cm、残存高4.4cmを測る。

これらの遺物の時期は1~6の蓋杯が大谷編年5期、7が6期に位置づけられると考えられる。また玄室入り口付近で出土した9は5期以降のものと考えられる。

前庭部の土層観察でははっきりしなかったが、玄室内より6期の蓋1点が出土したことから、やはり追葬行為があったものと考えられる。



第22図 2号横穴墓実測図



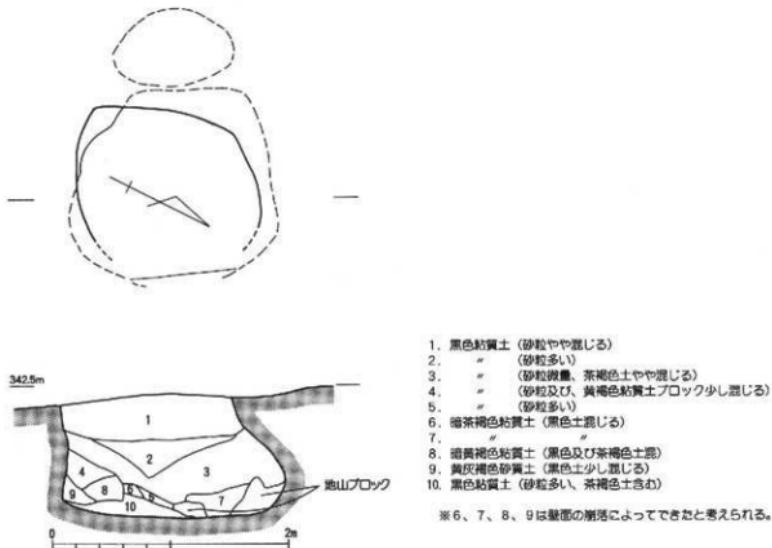
第23図 2号横穴墓出土遺物

(SK02)

1号横穴墓の北側で検出した土壙である。重機道の掘削の際に壁面の一部が削られている。天井部に開口し内部は袋状を呈する土壤で、南西側の壁面をさらに削り込んで副室状の空間を作っている。

平面的には雪だるま形の平面形を呈し、北東側の部屋（以下本室）はほぼ円形のプランを呈し、直径は約1.7m、深さ1mを測る。副室は本室から6cm程高く段差がつけてあり、長楕円形のプランを呈する。幅は南北軸1m、東西軸65cmで、天井部までの高さは約40cmである。

内部には底部に壁面崩落層と考えられる暗黄褐色土が堆積し、それより上は天井部分まで黒色土が堆積していた。出土遺物などは皆無であったため、この遺構の性格、時期については不明である。



第24図 SK02実測図

V 小 結

今回の調査では、当初予想していた以上の成果を得ることができた。以下検出した遺構ごとに整理していく。

1. 古墳群について

今回調査した3基の古墳は結果的にいずれも古墳ではないとの結論に達した。

しかし、1号墳については室町時代初頭の中世墓の可能性が高いことが判明した。墳頂部には室町時代初頭と考えられる宝鏡印塔1基のみが存在し、また墳丘も尾根頂部を大規模に削って塚状の地形を造成していることから、墓地であるとすればかなり有力者のものであると考えられる。このように中世墓で塚を伴う例は島根県内では数例確認されているが、その多くが盛土により塚を造っている。本例のように地山削り出しによって造られた事例は少なく、今後の資料の増加に期待したい。

付近には中世城郭である茂那木城跡（虫木城山）が存在しており、それとの関係も注意していく必要があろう。表土中からは宝鏡印塔片と共に備前系陶器片が出土しており、藏骨器であった可能性も考えられるが、口縁部など比較的時代判定の容易な部分がないため宝鏡印塔に伴うものであるかは断言できない。

2. 土壙群について

I区では8基、II区では1基の土壙を検出した。I区のものはほとんどが狩猟用の落とし穴と考えられるが、SK07・08・09の3つの土壙はいずれも尾根上の比較的近い場所に集中しており、また3遺構とも形状・規模ともに似通っており、さらに内部に炭化物が多く堆積している事など共通点が多い。骨片などは検出できなかったが、これら3つの遺構は中世の火葬墓である可能性も考えられる。

各土壙の構築時期を決定することは困難であるが、SK01は唯一、縄文時代後期初頭の深鉢片を出土しており、おおむねこの時期のものとみてよいであろう。このことは本遺跡周辺は縄文人の行動範囲であったことを物語っており、周辺地域においてこの他に集落跡など縄文時代の遺跡が存在する可能性がますます強まったと言えよう。

3. 横穴墓について

II区からは横穴墓2基を検出した。1号・2号穴とも出雲地方山間部に通有の三角テント型の玄室を有するものであり、1号穴では墓道部の堆積土中に二次埋葬時に動かされた閉塞石4個の他、一次埋葬時の副葬品とみられる須恵器類（大谷編年5、6期）と鐵鍬、砥石が搔き出されたような状態で出土した。閉塞方法は閉塞石の数が少ないとと、玄門前の床面にははずされた石材の圧痕が一部残ることから、板材などを立てかけて、ズレないようにその足下に石材を置いて固定する構造であったと考えられる。玄室内には追葬時の遺物とみられる高台付きの杯身があり、また玉髓質の石材も1点副葬されていた。石材は一部に加工痕が見受けられるが、一般的に見て副葬品とする

にはあまりに粗末な物である。これを玄室内に副葬することがどのような意図によるものなのかは今後の事例を待ちたい。

2号横穴墓からは玄室内より須恵器が9点出土した。その内玄室左半部で検出した蓋杯は床面に蓋と伏せた杯身を並べた状態で出土し、土器枕と判断した。このことから被葬者は左側壁に沿うような形で頭を入口方向に向けて寝かされていたと推定される。

出土した須恵器は概ね大谷編年5期のものであるが、その中で1点だけ大谷6期の杯蓋が見られる。このことから2号横穴墓でも追葬行為が行われた可能性がある。

次に今回検出した2つの横穴墓の造営時期については、1号横穴墓出土の杯蓋は古いもので大谷編年6期のものであり、2号横穴墓のように大谷編年5期のものは含まれていないことから、2号横穴墓のはうが1号横穴墓に先行するものと考えられる。

今回の調査では広瀬町で初めて不時発見ではなく完全な形で横穴墓の発掘調査を行うことができた。これにより得ることができた成果は必ずしも多いとは言えないが、今後同様な遺跡を調査する際に参考となることを願って締めくくることにする。

注

- (1) 広瀬町史編纂委員会『広瀬町史』上巻（広瀬町役場1968年）。
- (2) 杉原清一『足子谷横穴墓』（広瀬町教育委員会、1997年）。
- (3) 注1と同じ。
- (4) 島根県教育委員会『出雲・隠岐の城館跡』島根県中近世城館跡分布調査報告書<第2集> 1998年。
- (5) 注4と同じ。
- (6) 注4と同じ。
- (7) 注4と同じ。
- (8) 注4と同じ。
- (9) 注4と同じ。
- (10) 注4と同じ。
- (11) 島根県教育委員会『島根県遺跡地図I（出雲・隠岐編）』1987年。
- (12) 注11と同じ。
- (13) 注11と同じ。
- (14) 注11と同じ。
- (15) 島根県埋蔵文化財調査センター間野大丞氏、今岡利江氏のご教示による。
- (16) 柳浦俊一『山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年－中津・福田K2式土器群、縁帯文土器群の地域編年－』島根考古学会誌第17集（島根考古学会、2000年）。
- (17) 大谷晃二『出雲地域の須恵器の編年と地域色』島根考古学会誌第11集
(島根考古学会、1994年)。

図 版



1号墳室籠印塔検出状況（東から）



1号墳北側墳裾土層（西から）

図版 2



1号墳東側墳裾土層（南から）



1号墳完成状況（北東から）



2号墳墳頂部土層（南から）



SD01土層（西から）

図版 4



SD01 完掘状況（東から）



2号填完掘状況（南から）



3号墳南北ベルト土層（南西から）



3号墳完掘状況（南東から）

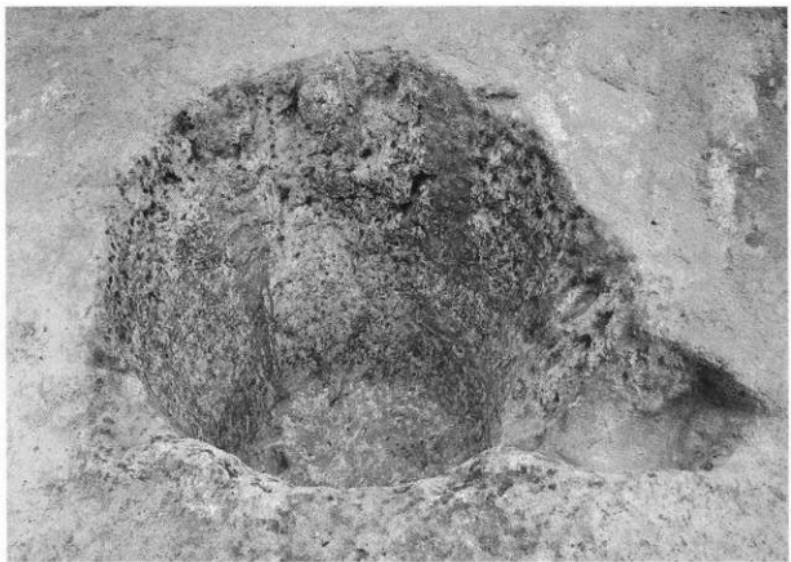
図版 6



SK 01 土層（北から）



SK 01 繩文土器出土状況（西から）



SKO 1 完掘状況（西から）



SKO 3 完掘状況（南西から）

図版 8



SK 04 土層（北から）



SK 04 完掘状況（北から）



SK05土層（北から）

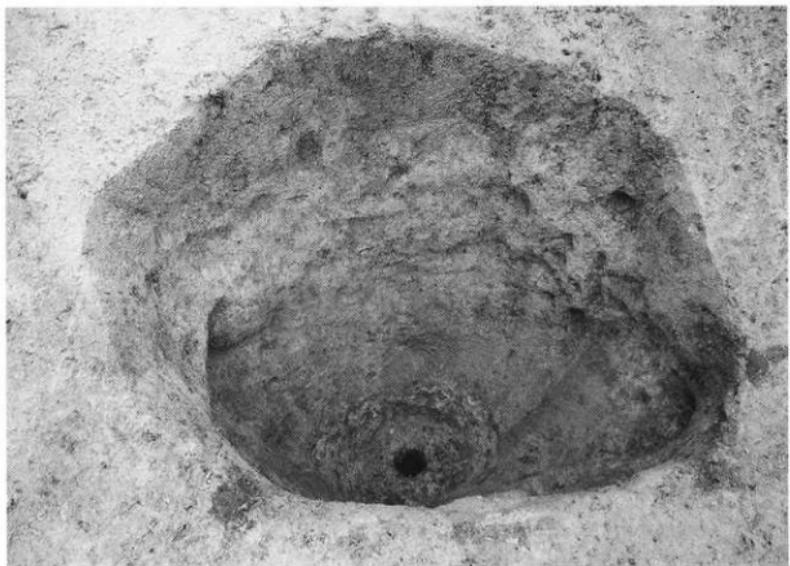


SK05完掘状況（北から）

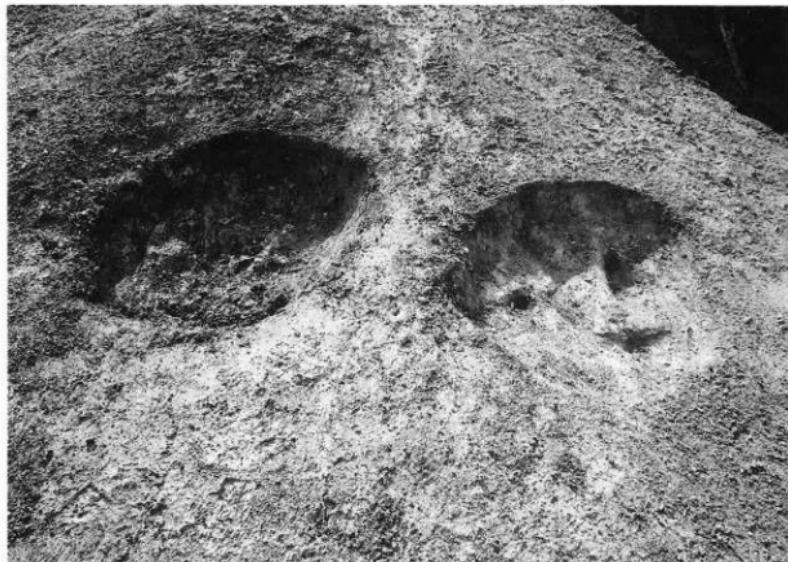
図版 10



SK06土層（北から）



SK06完掘状況（西から）

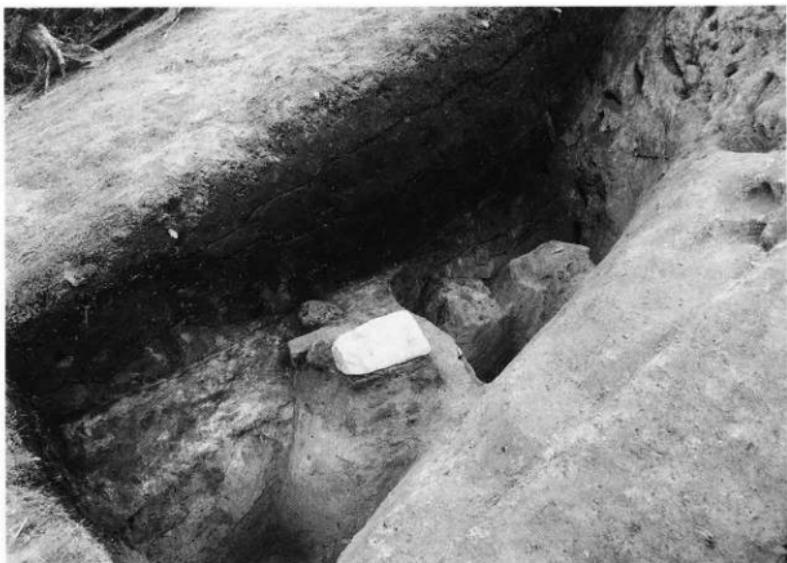


SK07・SK08発掘状況（北から）



SK09発掘状況（北東から）

図版 12



1号横穴墓閉塞石及び鉄轍検出状況（北東から）



1号横穴墓前庭奥部上層（北から）



1号横穴墓前庭前半部土層（北東から）

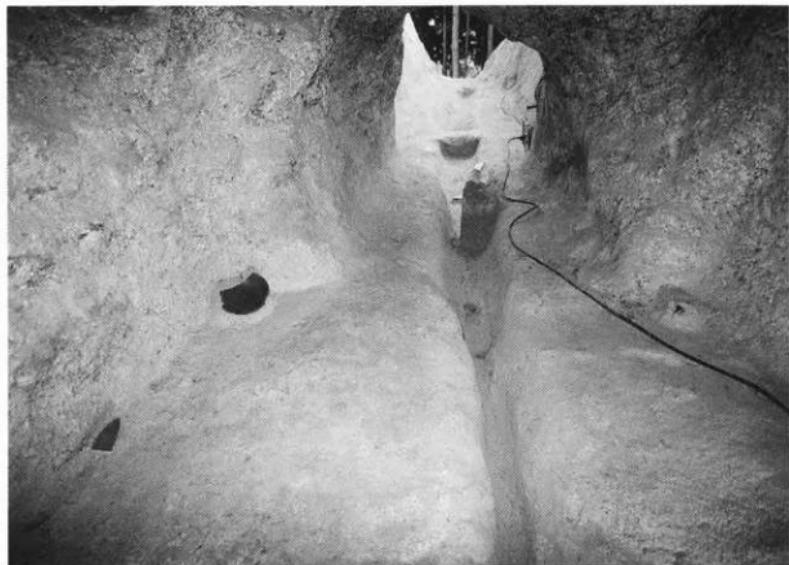


1号横穴墓前庭須恵器出土状況（東から）

図版 14



1号横穴墓前庭完掘状況（東から）



1号横穴墓玄室内状況

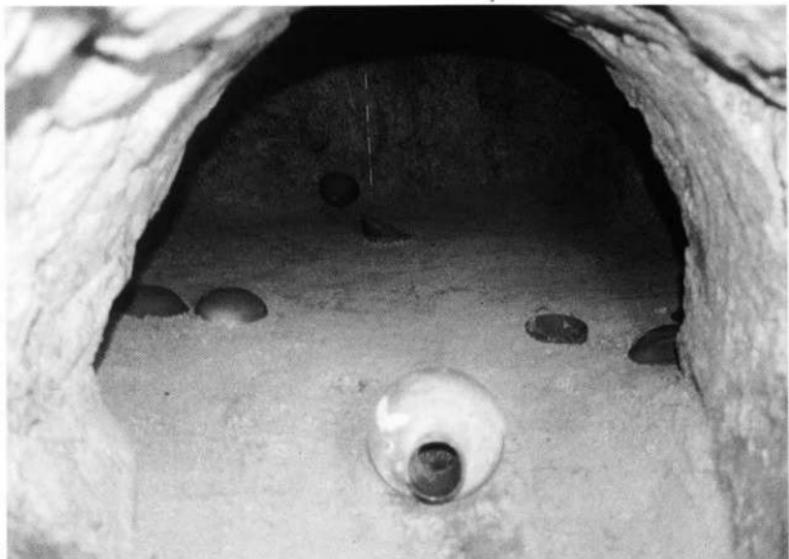


2号横穴墓前庭部土層（南西から）

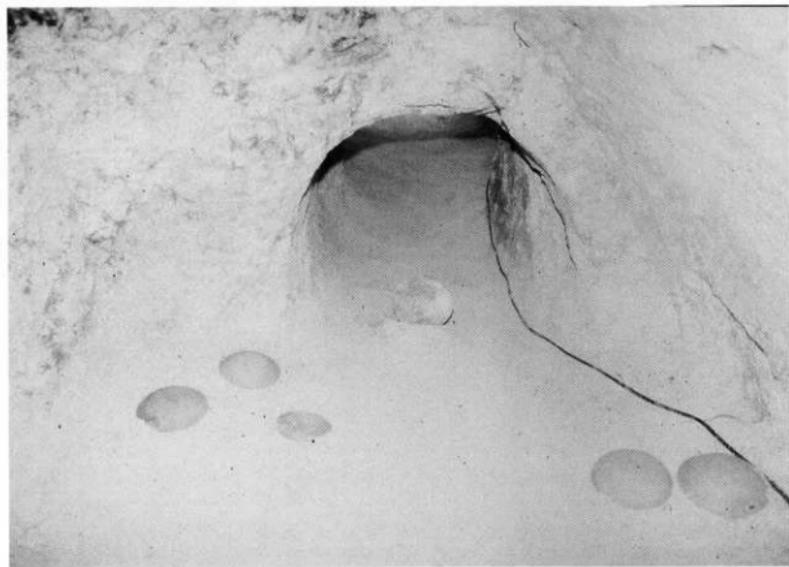


2号横穴墓前庭完掘状況（南東から）

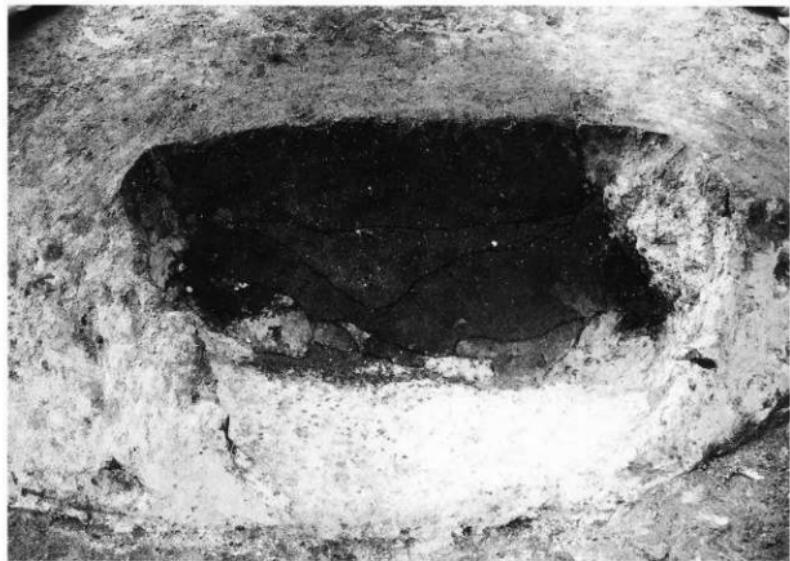
図版 16



2号横穴墓玄室内状況（玄門より）



同（奥より）

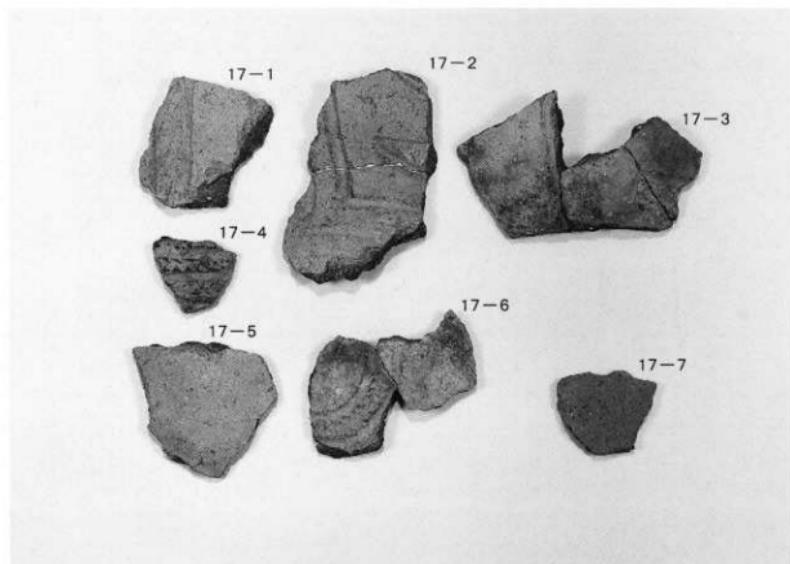


SK02土層（東から）

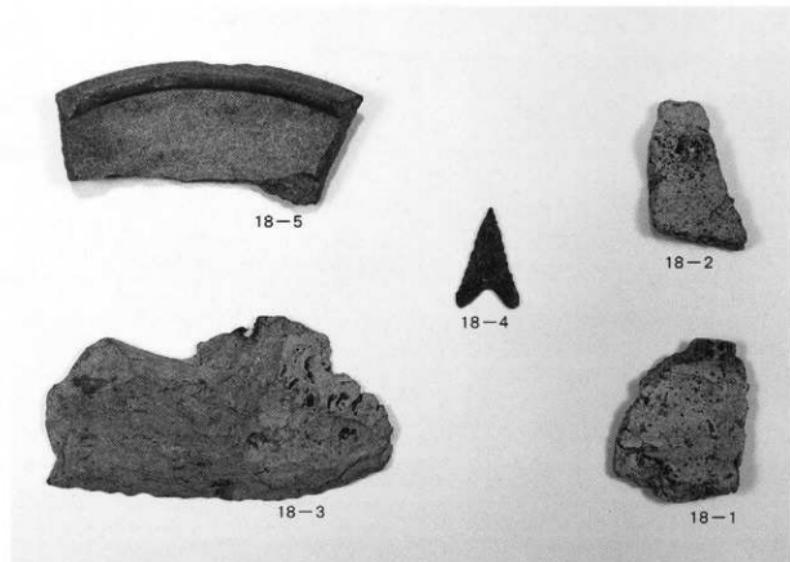


SK02完掘状況（東から）

図版 18

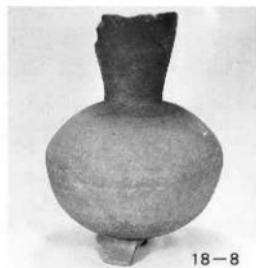


SK01・SK04出土遺物



その他の遺物

図版 19



その他の遺物



1号墳出土遺物

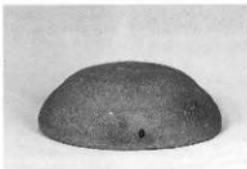
圖版 20



1号墳出土遺物



21-2



21-3

21-1



21-6



21-4

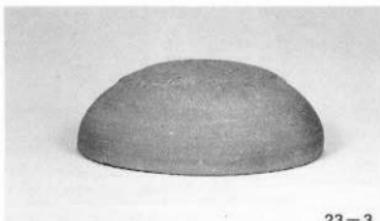


21-5

1号横穴墓出土遺物



23-1



23-3



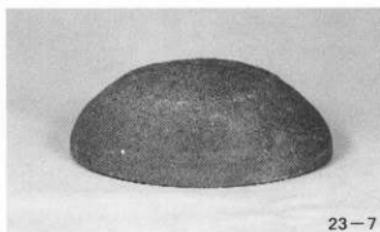
23-2



23-4



23-5



23-7



23-6



23-9



23-8

2号横穴墓出土遺物

経負坂古墳群

一般県道草野・横田線(東比田工区)
特別県単事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年3月

発行 広瀬町教育委員会
島根県能義郡広瀬町広瀬 811
印刷 (株)太陽平版
島根県安来市安来町 765 5